

「すごい」がすごい、虫の本

札幌市医師会
札幌清田病院

ごとう よしろう
後藤 義朗

『香川照之の昆虫すごいぜ!』は、カマキリの着ぐるみで登場するカマキリ先生が昆虫の生態を紹介する番組で(2016年10月からEテレで放送開始)、その内容をまとめた特集号が出版された¹⁾。地域限定版の特製ブックカバーには地域を代表する昆虫を選んだ。北海道はエゾセミだ。

カマキリ先生はホワイトボードで説明し始めるともう自分の世界だ。トークはカットされるが、虫好きの「すごさ」は十分伝わる。虫取りのロケの際、スタッフが先に見つけると、その悔しさを顔一杯にした「虫屋」へと変わるのも面白い。2022年新年の特集は「ザ・完全変態」と、チョウが冬を過ごすサナギを観察することから始まった。春や夏の続編が楽しみだ。

かつての昆虫少年は虫の音に心が騒ぐ。昨夏は6月の急な暑さで慌てて鳴き始めたセミも、7月の涼しさで、鳴りを潜め、秋の虫の出番になった。

虫好きの究極型は「虫屋」だ。「虫屋」の定義は、『昆虫を愛し、こだわりをもって、その観察・捕獲・飼育・育成・標本作成・研究などを趣味とする人のことで、単に「虫好き」や「昆虫マニア」という言葉とは異なり、昆虫に一定程度のこだわりをもって、主にポジティブに使われる』²⁾とある。まさに、これが虫屋の「こだわり」で、昆虫少年はそのサナギなのだ。

世の中には虫屋が多い。朝日新聞に「新・ドリトル先生物語」を執筆中の生物学者福岡伸一氏もその一人。「ドリトル先生航海記」を読んで生物学者になり、ダーウィンが訪れたガラパゴス諸島を巡り、自分の動物記を書いた。また、昆虫エッセイストの奥本大三郎氏は、ライフワークでファール昆虫記を完訳したが、『蝶の唆え』³⁾の自伝エッセイで昆虫愛を著した。虫屋は自分の道を貫くのだ。一方で、現役の昆虫少年といえば、小学校6年の柴田亮氏だ⁴⁾。昨年の4月、米生態学会の「エコロジー」にカブトムシの観察記録が掲載された。夜行性のカブトムシが、昼でも庭の木(東南アジア原産のシマトネリコ)にいることを不思議に思い、昼夜の数を毎日記録した。昼でも活動する理由を、共著者山口大の小島渉氏が語った。「光、温度、餌で習性が変わる、日本のカブトムシが外来植物と出会い、本来なかった習性が引き起こされたのでは」と。つまり、昆虫は生き抜くための多様性を持つ。確かに、カマキリ先生も、地球上にいる生物約170万種のうち100万種以上が昆虫で占められ、環境に合わせ、姿、生き方を変えて

も生き残るという多様性に富む」とも語る。

夏の書店には虫の本が集まる。書名に「すごい」が目立つ。2013年には図鑑で『イラスト図解 昆虫はすごい!』(宝島社)、2014年には『昆虫はすごい』(光文社新書)が出版された。この「すごい」は昆虫の世界での常套語なのだ。本を検索すると、「すごい」だらけ。『ウニはすごい バッタもすごい』(中公新書)などは二回も重ね、むしろ虫屋の語彙力が低いかもしれない。辞書での「すごい」は、「恐ろしい、気味が悪い」と「驚くほど程度が並外れている」の二つがあり、昆虫の世界では当然後者の引用だ。

虫屋が納得する「素敵」の意味は、通常の読者と違う。異次元でマニアックな『世界の美しすぎる昆虫』(宝島社)もある。『ミラクル昆虫ワールド コスタリカ』(ナショナルジオグラフィック社)は横文字だが、副題は「ヘンな虫、スゴイ虫」と添えられて、やはり「すごい」が効果的なのだ。『昆虫超最驚図鑑 小さいけど凄いヤツら』(永岡書店)は、漢字が読めない良い子でも、「230匹」の数字が光っているから「すごさ」が伝わる。虫好きが集まった鼎談⁵⁾は、虫愛の強さが輝くが、少々マニアック過ぎて、虫屋しかついていけない。

その昔、ノートの表紙に昆虫が鎮座したジャポニカ学習帳があった。2012年廃版となったが(Amazonで復刻版を販売中)、親御さんから、気持ちが悪いとのクレームで絶滅した。大人の偏った常識で子供達の純粋な「虫愛」を潰してはならない。虫屋の広報活動上将来的な課題だ。

思えば、筆者の虫へのこだわりも異常だ。その昔、まともな標本はできなかつたのに、クワガタ、蝶、トンボに憧れた。虫好きなのに部屋に舞い込む突然の訪問者は好きになれないのも矛盾だ。息子は小3時バッタの脱皮の観察ノートを残したから多少は虫愛が伝わったのかもしれない。かつての昆虫少年は、図鑑の写真の虫と一緒に走り回るのが好きだ。でも、昆虫の方から冷たい視線を感じる。

「あんたは『ほんの虫屋』やないか」

<参考>

- 1) カマキリ先生著 NHK香川照之の昆虫すごいぜ! 図鑑 vol. 2 NHK出版 2021
- 2) 高田兼太:「虫屋」とは? -リフレームによる言葉の分析 きべりはむし37(1) 36-38, 2014
- 3) 奥本大三郎著 蝶の唆え 小学館 2020
- 4) 柴田 亮、(杉戸町立杉戸第三小学校)、小島渉(山口大学): An introduced host plant alters circadian activity patterns of a rhinoceros beetle (外来植物がカブトムシの概日活動パターンを変化させる) Ecology 2021
- 5) 丸山宗利、養老猛司、中瀬悠太 「昆虫はもつとすごい」 光文社新書772 2015